

〈研究論文〉

短期留学生のための日本語補講のコースデザイン

－日本語教育実習の観点から－

今井 多衣子

要 旨

2007年10月22日より11月16日の4週間、モンゴルからの短期日本語留学生4名に対する日本語補講を高知女子大学の日本語教育実習生によって行った。通常の授業では15コマしかないため、時間枠を増やし、日本人学生との会話の時間も設け、夜間の講座にも出席する事により多くの日本人とふれあい、日本語学習の機会を得ることが出来るよう配慮した。既に初級の学習は終わっている学習者のため、初級日本語文法項目の見直し、聞き取り及び会話力の充実の2点を目標としてコース設定を行った。限られた授業枠の中で日本人実習生も日本語学習者も双方が満足 of いく内容のコースデザインの構築を目指した実践報告である。

【キーワード】

コースデザイン、日本語補講、日本語実習、短期留学生、実践報告

0. はじめに

現在多くの大学で日本語教育関連科目が設置されてきている。高知県でも以前は英文国文の文学部であった高知女子大学が文化学部に変更になり、さらに日本語教育科目の増設により日本語教員免許の単位取得を目指そうとした取り組みが行われてきている。しかし、そのような大学においては実質的には自前で日本語実習が出来る状態ではなく何らかの手だてを考えながら実際の演習・実習をこなしていかなければならない状況である。今回は高知女子大学における短期日本語学習者のコースデザインについて、実習の観点からの取り組みについて報告したい。

1. 実習方法

実習を実施する場合次のような方法があると考える。

- ① 同一大学内にある留学生センターや別科などで学んでいる学生に対する

実習

- ② 地域の別の機関を利用しての実習
- ③ 海外の学校（協定校等）での実習⁽¹⁾
- ④ 日本人学生による模擬実習

①は望ましい方法のひとつであるが、それぞれのカリキュラムの中に実習生を組み入れる場合、本来の学習予定に不都合な場合も出てくる。②は地域の機関で適当な学習者が確保できるかどうか問題となる。また、①同様その機関でのカリキュラムにうまく組み込むことが出来るかどうかの点も問題である。又実際の授業はしばしば夜間の場合もあり、通常授業時間帯での実習は出来ない場合が多い。③も①同様望ましい方法ではあるが、経費がかさむ点、実習対象の学生の情報が事前につかみにくい場合がある点等が問題となる。④に関しては、日本人であるために経験が浅い日本人学生が外国人学習者のような誤用などを故意に演じながらの参加は難しく、どうしても、日本人として学習内容が分かってしまう点が大きな問題となる。

上記のほかに①の変則の場合として短期留学生への日本語実習の場合がある。これは、日本の大学に短期留学してくる学生に対しての日本語補講を行う際、実習を兼ねるものである。場所の移動をせずに大学内で実習ができることは日本人学生にとっては大きな利点となる。今回の報告はこの場合となる。

2. 高知女子大学での日本語教育科目

高知女子大学では、2003年度に日本語教授法、日本語教育教材論の2科目の授業を開講し、この2科目の受講修了者に対し、翌2004年度から日本語教育演習、日本語教育実習を開講した。これらは全て開講当初から非常勤講師である筆者が担当してきている。

日本語教育実習の受講者は2004年度は3名、2005年度は14名、2006年度は5名、2007年度は11名であった。最初の3年間は上記②の方法で実習を行ってきたが、①実習場所への移動を伴う点、②受講生が多い場合対象学生を得にくいなどの問題があった。

3. 2007年度の日本語教育実習

2007年10月に高知女子大学と提携を結んだモンゴル科学技術大学から8名の短期留学生が来高することになった。その際、日本語力の充分でない学生

に対しての日本語補講を実習の中で行うことになった。今回の日本語教育実習受講者も11名と多く、他機関での実習や移動は難しい状況だったこともあり、今年度は初めて女子大学内での実習を行うこととなった。

4. 実習内容

4. 1. 対象者

今回の対象者はモンゴル国立科学技術大学日本語学科4年生7名、2年生1名、計8名。全員女子学生である。うち1名が日本語能力試験2級を取得していた。対象学生のこれまでの学習テキストは以下のものであった。

『みんなの日本語初級Ⅰ/Ⅱ』『みんなの日本語初級Ⅰ/Ⅱ漢字英語版』『日本語中級J301』『日本語中級J501』『文化中級日本語Ⅰ/Ⅱ』『新日本語の中級』『留学生・技術研修生のための使える日本語読解編』『大学・大学院留学生の日本語』

4. 2. 期間

2007年10月22日から11月16日までの4週間。

4. 3. プレイスメントテスト

学生の日本語レベルが一定していないので、通常授業に参加するグループと日本語補講を行うグループとに分ける必要があった。そのため授業開始に先立ちプレイスメントテストを行った。結果は以下の通り。

名 前	①読解	②聴解	③面接	備考：全員初来日
<A 1> J. A.	130/177	22/27	上一上	能力試験2級取得
<A 2> N. B.	69/177	21/27	上一上	
<A 3> T. T.	88/177	19/27	上一中	
<A 4> U. S.	102/177	22/27	上一下	
<B 1> L. B.	19/177	12/27	上一下	
<B 2> B. B.	49/177	11/27	中一上	2年生
<B 3> C. O.	44/177	15/27	中一上	
<B 4> L. S.	47/177	17/27	中一下	

内容は平成16年度日本語能力試験2級問題の読解と聴解問題及び筆者の5分の面接結果によるものである。これにより通常授業へ参加するAグループ

4名と、日本語補講に参加するBグループ4名にわけた。以下はBグループの学習報告である。

4. 4. コースデザイン

4. 4. 1. 目標

受講生は既に初級の項目は学習してきているので次の点を目標とした。

- ① 既習項目の確認
- ② 聞き取り及び、会話力の充実

①に関しては、実習を行う日本人学生が前期の演習で学習してきたのが『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』だったので、実習学生の準備ができていたのは初級に限られたためである。また、この点に関しては初めて実習を行う学生にはやはり最初に、初級を経験して欲しいという筆者の希望があったことも理由である。そのため、学習者にとっては既習項目ではある初級後半の文法項目を実習学習内容にあげた。②は日本にいるという状況を最大限いかしてもらいたいため、できるだけ多くの日本人と接して様々な日本人の音声にふれ、聞き、話すことができるように設定した。そのためには①で毎回異なる日本人の発音を聞くことも有益であると考えた。

4. 4. 2. 授業設定

実際の実習時間として設定されているのは15コマである。しかし、これでは4週間高知で過ごす学生にとっては少ない。このため、実習学生には担当内容の教科学習1コマ、それに付随してその課のタスクにあたる内容をもう1コマ、各自2コマの担当課題を与えた。また、会話練習の相手として、日本語教育教材論の学生に個別会話練習を主体とした授業を1コマうけもってもらい、少ない授業時間を補った。また、高知短期大学で行われている夜の中級の日本語授業にも参観させて貰うことにより時間数をふやした。そして、大学内ではないが、毎水曜日夜7時から9時に行われている南国市国際交流協会主催の日本語講座に出席することにより更に多くの日本人とふれる機会が持てるよう配慮した。その結果なんとか毎日1～2コマは日本語授業を確保できた。

学習内容は以下の通りである。(1)(2)に関しては後述する。

- (1) 実習『みんなの日本語初級Ⅱ』：30回
- (2) 日本語教育教材論学生：『スピーチと作文のレッスン』：5回

- (3) 高知短期大学中級日本語授業：2回参加
- (4) 南国市国際交流協会日本語授業：4回参加：読解中心の授業内容

4. 4. 3. 学習手順

(1) 実習『みんなの日本語初級Ⅱ』

前述したように日本人学生は前期の演習で教材分析は行っていた。今回の実習では次の点に留意して教案を作成し、授業内容を考えるよう指示した。

- * 導入（ウォーミングアップ）→復習→本題（学習項目の導入：目的明示・説明）→展開（練習）→まとめ（確認、補足）→終わりの挨拶（宿題提示、次回予告）
- * 現在手に入るあらゆる教材を使って授業を効果的にできるように考え、媒介語を使わずに授業を行うこと。
- * 2コマめは担当課の文型を使った会話練習及び問題の定着のためのタスクを考える。

又これまででは時間を取って行っていた振り返りは今回は時間的に取れない状態なので、実習授業の最後に行う講評と参観学生の見学表によって振り返りとした。

各学生が担当した課、及び考えたタスクは以下の通りである。

- ① 26課（～んです）：早口ことば
- ② 29課（自動詞＋ている）：練習タスク
- ③ 31課（意向形）：昔話絵本
- ④ 32課（～たほうがいい）：おみくじ
- ⑤ 34課（～通りに）：日本料理の説明
- ⑥ 36課（～ように）：日本の最近の歌
- ⑦ 37課（受身）/48課（使役）：クロスワードパズル
- ⑧ 41課（待遇表現を伴った授受）：漢字
- ⑨ 46課（～ところ）：人形劇（ギルド）
- ⑩ 47課（～そうです）：モンゴル旅行
- ⑪ 49課（尊敬）：劇（はだかの王様）
- ⑫ 50課（謙譲）：手紙の書き方

また、上記の他に最初に全員による顔合わせ、日本文化体験として「生け花」の体験、そして最後に全体の総仕上げとして日本人学生と組んでスピーチと技能発表の会を今回参加の全員の留学生で行った⁽²⁾。

- (2) 日本語教育教材論学生：『スピーチと作文のレッスン』（アルク）1，2，3，4，5，8課

日本語を教えた経験のない学生のために授業の進め方を次のように細かく設定した。

* 1人が2人の相手をし、最初に自己紹介をする。（「始めましょう」、「終わりましょう」）

* 各課の内容のコピーは聞くことに集中させるために授業中には渡さないで最後に渡す。各課は2つに分かれているので、それぞれ次の手順で行う。

- ① 1について：〈A: Text〉日本人学生は最初の文を2回読む。
- ② それぞれの受講者に何が書かれていたのかを順番に聞く。
- ③ 〈C: Expressions〉それぞれの表現について質問し、できないものは丁寧に練習する。
- ④ 同じ手順で2をすませる。必要なら宿題を指示する。
- ⑤ 質問をして会話をする中で、できなかった語彙、表現、わかりにくかった言葉、又どういう文型を使ったかなどをノートへ書き留めておく。

会話の話題に関してはこちらから指示を出して決められた質問をして会話するよう指導した。会話の話題は次のような質問である⁽³⁾。

- ・モンゴルではどんな漫画が人気がありますか。
- ・あなたの大学ではどんな学部が人気がありますか。
- ・どうしたら長生き出来ると思いますか。等

4. 4. 4. 実習成果

(1) 日本人学生

実習を行った学生達の成果としては、90分2コマを使って実際に日本語授業を行うことにより教授経験が積めたことである。そして、日本語教育教材論の学生にとっては教えるための初歩の経験ができたことがあげられる。

(2) 日本語学習者

学習者からの成果を確認するため次のアンケートを行った。

- 1：この授業はやくにたちましたか。 * 4名全員：はい

・どうして そう 答えたのか くわしく 書いてください

- 2：2コマ目の授業はどの回がおもしろかったですか。

おもしろかった授業に○をつけてください。 * 4名全員：全部○

1 に関しては次のような意見があった。

- ・ 文法項目は以前学習した事だったので忘れてしまっていたことの復習になった。
- ・ 日本人学生が一生懸命教えてくれてとてもうれしかった。

2 に関しては次のような意見があった。

- ・ 日本人学生がいろいろ考えてくれておもしろかったです。

1 の意見から当初の目標だった既習項目の確認という目標は達せられたと考える。また、否定的な意見はでなかったのでこの授業に対して、満足してはくれたように思える。しかし、実際の授業では、自動詞、他動詞の対応、使役、敬語の表現に関しては知識が不確実である事を感じ、これらの学習項目の完全な理解の難しさを痛感した。

4. 4. 5. 最終模擬テスト

最終的な日本語力を知るために最後に各人が望む級の模擬試験を行った。実施内容は平成16年度日本語能力試験1級問題、2・3級模擬試験、OPIは筆者が各人に対し30分の面接を2回行った結果である。

名 前	①読解・文法	②聴解	③文字・語彙	総 計	OPI①②
<A 1> J. A.	<1 級>131.9/200	70/100	68.8/100	270.7/400	上一下
<A 2> N. B.	<2 級>実施漏れ	75/100	82.2/100	157.2/200	中一上
<A 3> T. T.	<2 級>実施漏れ	66.6/100	64.4/100	131/200	上一下
<A 4> U. S.	<2 級>実施漏れ	66.6/100	88.8/100	155.4/200	中一中
<B 1> L. B.	<3 級>100/200	56/100	60.5/100	216.5/400	中一下
<B 2> B. B.	<2 級>			提出せず	中一中
<B 3> C. O.	<2 級>126.1/200	75/100	74.4/100	275.5/400	中一上
<B 4> L. S.	<3 級>84/200	70.8/100	79/100	233.8/400	中一中

4. 4. 6. 比較考察

前掲の最終テストと4. 3. のプレイスメントを比較すると次の点が指摘できる。

- ① A 1, A 2 はあまり変わらないが、他の学生に関しては読解、聴解とも

に今回のテストではかなり点数が上がっている。Bのクラスの学生に関しても3名ではあるが点数は伸びている。特にB3が著しい。

- ② 最初の5分の面接ではほとんどの学生は最終面接よりよく話せる印象を持った。これは限られた短い時間では学習者の会話能力を確実に判定する事は難しいためと考える。最初の印象だけでは判定できない事を改めて感じた。しかし、30分面接して中級のレベルであると言う事は日常的な会話は充分維持できる能力を持っていると言うことである。
- ③ 上記②の点も考えると当初目標とした2点目の聞き取り、会話力の充実に関しても日本で学習、生活することにより成果は得られたと考える。

5. 今回の問題点

今回の実習の問題点としては次の点があげられる。

まず、今回は学習者のレベルが初級ではなかったため、実際の授業内容が初級者にふさわしくないような難しい表現を使用しているも、学習者は容易に理解してしまったため、本来の初級の実習にはならなかった点である。また、今回の設定は突然に決定されたため、出席学生の時間調整が難しかった。

これらの点に関しては留学生の送り出しをしている大学との細かな事前打ち合わせが必要で実習授業を設定する方から考えると予定が早くから決まっている事が望ましい。本来ならば後期の実習につなげる演習を前期で行っておきたいので、留学生の受け入れに関しての予定を出来るだけ早く把握して予定を組んでいけるような体制を望む。

6. おわりに

高知女子大学における短期留学生に対する日本語補講の実践について報告した。限られた授業枠の中で日本人実習生も日本語学習者も双方が満足のいく内容のコースデザインを目指したものである。そのためには可能な限りの機会を利用して短期滞在の日本語学習者に効率のよい学習機会を設定しなければならない。その際に大きくかかわって来るのが、相互協力が得られる人や機関とのつながりであると考え。勿論内容の充実が不可欠であるが、今回の経験をもとに更によりよいコースデザインを目指してゆきたい。

注

- (1) 高知大学人文学部での日本語教育実習もこの方法で行われている。
- (2) 最終回のお別れ会は次のような内容であった。
 - ①モンゴルの昔話、②お手前披露、③物語とともに変化していくモンゴルの折り紙、④キリル文字による書道、⑤モンゴル語を日本語で教える（発音と挨拶）、⑥モンゴルの遊び、⑦モンゴルツアーの勧め
- (3) 高知大学非常勤講師 池純子氏作成のものを利用。

いまい たえこ

(高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門非常勤講師)